

◎ 連合会・労協Gだより

例年、4月は、総会議案をまとめる苦闘が展開する。振りかえれば、一昨年のICA加盟の実現、映画試写会の成功によるとりくみの発展の予感など画期的な特徴を背景に、松本総会の最終準備をすすめていた。

今年は、その松本総会での、名称変更、役員「ゆるやかな世代交代」、労協として外に打ってでる方針にそっての豊富な実践をしっかりと総括し、第1次中期計画、最終年への力とし、合わせて、第二次計画を全組合員でつくるとりくみを提起することになる。

これまでは、全団に議案骨子を示し一せいブロック会議で、より早く、より広く全体のものにする努力が連合会のとりくみの重点であった。

今年は、「雇用シンポ」の第2弾、北海道労協の誕生、CICOPA世界大会への参加準備、大型監査を受けての財政の改善作戦など、馬力のい

る活動をすすめながらの議案づくりとなった。

本部常勤体制が鍛谷次長について、小沢常任理事の着任がこれを可能としたが、一番は、かつてない深刻な不況と雇用不安のこのようなときこそ、労協の真価が問われるとの思いを実践する。基礎的な力量をセンター、地域事業団が備えてきていること、各界の関心と期待に應えとりくみで、事態を打開する知恵と力を確かめ合うことをすすめながらの、各団での総括と議案づくりとして位置づいたことだ。

5月末の第15回総会の場合、この総集約となって、議案が実践的に肉付けられ、補強され、全団がとりくむべき課題を共有し、それへの挑戦の中で開かれようとしていることをひしひしと感じる。

中田宗一郎（労協連合会・専務理事）

◎ センター事業団だより

毎年1～3月に行っている123運動が今年は第6次を迎えた。仕事を拡大するという点で組合員の行動が新しい質を生み出した。昨年労働者協同組合の原則を鮮明にした定款改正を行い、様々な苦労はあったが一人一人の組合員の行動というかたちで実を結びつつあると評価している。4月5月はこの第6次123運動を含めて93年度の総括を行うことと94年度の事業計画を作成することが大きな課題である。理事会はこの時期「ヒヤリング」と称する事業所・ブロックの総括方針に関する聞き取り指導を行っている。「ヒヤリング」では「収支実績」との関係で労働者協同組合としての取組がどうであったのかが主要な課題となる。総代会で決定された「指標」を守っているという点では合格でも「労働者協同組合としての取組」という視点から評価すると「経理の公開」が不十分だったり、基礎となるべき団会議がしっか

り開かれていなかったりと様々な弱点も見えてくる。総括をしっかり行い、94年度どういう組織・事業・運動を目指すのか方針に生かさねばならない。

また、4月5月は新人事務局員候補の研修の期間でもある。今年は35人と多い。合宿やOJTで労働者協同組合1年生として最初の教育をうける。4月下旬の合宿では富沢先生に3時間に及ぶ熱弁を奮って頂いた。OJTでの感想を出し合いながらの討論も行った。まだまだ不十分なことが多い組織である。新人の率直な感想にも不満が多い。1年もすれば取るに足りない問題でも今は目先の事実真剣である。耳を傾けながらも、これから組織の中核を担っていく幹部として、視野を大きくもって若者らしいエネルギーで現状を変える存在になって欲しいと願う。

坂林哲雄（労協センター事業団・事務局長）